

# 小学校家庭科における生命の教材化（第5報）

—「教育実践研究」受講生の意識—

The Teaching of the Concept of "Sex and Life" in Elementary School Home Economics Class (Part 5): Responses of the Students who Took the Course on Practical Studies of Teaching

高橋 類子      石塚 美保\*  
Ruiko Takahashi      Miho Ishizuka

This paper reports the responses shown by the students who took the course on practical studies of teaching, when they were exposed to a report concerning a class in elementary school home economics. The following responses were obtained:

1. 45.5% of all the students showed a strong support for the efficiency of the subject of 'long standing relationships with the family members beginning at the stage of a fetus' as a topic of home economics at elementary school level and 50.8% showed support, with the total of 98.3% supporting this topic as a suitable one.

2. Of the four materials presented in the lesson on "when I was still in my mother's womb", "Letters form Parents" obtained the highest evaluation from the participasts.

3. Now that the 'adoption' of 'selected information and knowledge' in the process of making raw materials into teaching materials proved to be successful, the task at the next stage is to select and place essential teaching materials in the curriculum of elementary school home economics.

## 1 緒 言

性や生命に関する概念の教育・教材化の優れた担当者は、よい養成機関で教育を受けることが必須なことである。教育実践研究受講生を含む教育学部1～4年生を対象に、過去に受けた性や生命に関する教育とそれに対する意識を調査した結果<sup>1)</sup>、彼らの小学校時代に指導してもらってよかった内容の1位は初潮指導で、指導してほしかった内容で最も比率の高いのは生命の誕生であった。そして、全体に学生が教えてもらいたいと思ったのに、教えてもらえなかった項目の方が、彼らがためになったと思っている項目よりも多かった。いいかえれば、彼らは、現在でもより広範に、性や生命についての教育を受ければよかったと考えていた。

本報では、以上のような教育学部生の意識をふまえ、第4報での小学校家庭の生命の教材化の授業実践例を教育実践研究で報告し、教師をめざす教育実践研究受講生の反応・評価を概観した。

---

\* 上越市立大和小学校教諭

表1 方 法

	S 57 年 度	S 58 年 度
1. 対 象	小学校家庭の授業 受講生 170 名	右に同じ 320 名
2. 期 日	S57年9月15、16日の放課後 " 17日(金)第1限	S58年10月21日(金)第3限
3. 授業実践例の聴講	2年次教育実習教育実践研究小学校家庭の授業の指導案を各年度ごとに表2に示した。生命の教材化を意図しておこなった実践例の報告にあてた時間 50/90min	40/90min
4. 意識調査法	アンケート調査 回収率100%	アンケート調査 回収率100%
5. 調査内容	1. 教育実践研究授業の効果 2. 生命の尊さを取りあげる意義 3. 家庭科のイメージ	1. かみにくさの違う食物 2. あごの大きさと歯ならび

2 方 法

方法に関する事項を表1に示した。対象は、教育実践研究「小学校家庭の授業」受講生で昭和57年度は170名、58年度は320名であった。年度別当日の授業案を表2に示したが、生命の教材化を意図しておこなった実践例の報告にあてた時間は、S57年度は90分中の50分であり、S58年度は40分であった。

3 結 果

1. 調査対象者概要 対象学生の成育した時代的背景を昭和57年度2年次学生を中心に表3に示した。対象学生は1960~'64年に誕生し、この時期は、生命概念教育への芽とも受けとれる日本の性教育の始動期にあたり、小学校家庭科を履習する小学校5、6年時は、日本の性教育も外国からの豊かな情報の中で、マスコミ、保護者ともに社会一般が、性教育の必要性を容認し、青少年への性の問題への対応を求めていた高揚期にあたった。従って、彼らは'70~'75年の、この種の教育が、最も格調高い時期に、小学校の家庭科を履習していた。

年齢は75%が19~20才で、25%が21才以上であった。出身地は下越地域が51%で最も多く、他の学年よりも下越の占める割合が15%前後高かった。居住地域は、住宅地域が49%、農・山・漁村が44%と他学年より若干比率が高く、商業地域が3%で、他学年より5%低かった。家庭の雰囲気は、明るく楽しかつ

表3 対象学生の成育年代

西 曆	昭 和	生命教育の流れ	大学4年生	3 年 生	2 年 生	1 年 生
1960	35		誕 生			
61	36	※始 動 期		誕 生		
62	37				誕 生	
63	38					誕 生
64	39		幼 児 期			
65	40			幼 児 期		
66	41	※児 童 ・ 生 徒 へ の 調 査 活 発	小学1年		幼 児 期	幼 児 期
67	42		2	小学1年		
68	43		3	2	小学1年	
69	44		4	3	2	小学1年
1970	45	※高 揚 期 ・ 外 国 からの 情 報	5	4	3	2
71	46		6	5	4	3
72	47	・ 助 日 本 性 教 育 協 会 設 立	中学1年	6	5	4
73	48	・ 青 少 年 へ の 性 の 必 要 性 容 認 ・ 対 応	2	中学1年	6	5
74	49		3	2	中学1年	6
75	50	・ 日 本 = 性 研 究 会 議 設 立	高校1年	3	2	中学1年
76	51		2	高校1年	3	2
77	52	※調 査 ・ 指 導 ・ 研 究 に 対 し 拒 否 的 態 度	3	2	高校1年	3
78	53		3	2	高校1年	3
79	54		大学1年	3	2	高校1年
1980	55	※沈 滞 期	2	大学1年	3	2
81	56	科 学 技 術 生 命 に 挑 戦	3	2	大学1年	3
82	57	調 査 一 向	4	3	2	大学1年

表2 2年次 教育実習「教育実践研究」授業案

昭和57年度

時間	分節	内容	資料
9:00	1.導入	・小学校家庭科の授業について ・本時のねらい 家庭生活をみつめる——子どもの実態 共通語題提示——家庭科の基礎学力 共通教材を作る	
9:10	2.展開	I 授業例 1. 単元 わたしたちの家庭 5年 ——わたしがお母さんのおなかの中にいた時の 家族のかかわり—— 2. 単元設定の理由 3. 子どもの実態 4. 授業の実際 5. 教材資料の作り方及び提示について	指導案 P2~6 図表 教えたい意欲 VTR 調査集計 授業風景 VTR 保護者からの手紙 子どものノート 板書のまとめ方 父親の声 録音 胎児のようす O.H.P.
10:00	II	家庭科の授業で実習を効果的にする実験について 1. 短時間で結果が利用するもの。 2. 操作が簡単であること。 3. 危険でないこと。 4. 実験のみで終わらないこと。	
10:01	※ 実験例	・気温と着装実験 → 「衣服の着方と替え方」機能に応じた衣生活の工夫。 ・繊維の鑑別実験 → 「衣服の手入れ」 — 上着のせんたく。 ・汚れたとり方実験 — 「衣類の衛生的な下着」 — 下着の着方と選び方。 ・服素材の吸水の実験 — 「衛生的な下着」 — 下着の着方と選び方。 ・ぬい方と止め方による引張強度の実験 — 「ふくろ」 — 布地や縫い箇所に応じた縫い方 ・ビタミンC検出実験 → 「生野菜の調理」 — 栄養と味つけ ・生野菜の放水実験 ・カロチン脂肪性実験 — 「野菜の油いため」 — 栄養 ・照度測定 — 「明るい住まい方」 — 採光と照度	
10:20	3.評価	・反省記録の観点	反省用紙

昭和58年度

時間	分節	内容	資料
1:15	1.導入	教育実践研究 家庭科の授業計画にあたって	
1:18	2.展開	I. 授業例 1. 「知っている」から「できる」へ 2. 「エアロンやカババー」類の製作の授業 ・子どもの知識及び問題意識 ・VTR教材の導入 ・エアロンと健康との関係 ・ある子どもの動き 3. 家庭科の学習を充実させるために	指導案 調査集計 VTR エアロンの有無による姿勢(図表) かっぱう着の汚れ(TP) コミュニケーション分析 子どものノート ・家庭科単元一覧表 ・第6学年1組家庭科 学習指導案 ・第4次の追求構造図 ・スライド「授業風景」 ・VTR「食事と子どもの健康」 ・かみにくさの違い食物 ・記入用紙 ・食事の見直しカード
1:58	II. 授業例	——6年「毎日の食事を見直そう」—— 1. 性や生命の概念に関する教育 2. 単元設定の理由 3. 子どもの実態 4. 授業の実際 5. 体験的学習	
1:59	3.まとめ	他領域への活用・発展	
2:37	4.評価	アンケート調査 かみにくさの違い食物・あごのアーチと歯ならび	アンケート用紙

た63%で、平均より7%の減。どちらともいえないは32%で4.25%の増、楽しくなかったもの1の増で5%であった。

性教育を受けたとするもの82%で、その有用性については、3点段落評点で258点で、学部生平均の227点より31点上廻る最高点であった。基礎的知識の定着性を知るための性知識に関する問いの正解率は30%と低く、他学年と大差はなかった。

2. 小学校時代に教わった性や生命に関する概念の教育

小学校時代の指導内容を図1に示した。指導してもらってよかった内容は、①初潮指導44%で最も高く、②家族の役割24%、③男女の生理現象および生命の尊さ19%と続き、該当項目のない学生も21%と多かったが、その割合は、他学年に比して最も低かった。指導してもらってよかった内容の最も低率な項目は、異性への関心8%で、性別には男子12%、女子4%であった。

指導してほしかった内容は、①生命の誕生47%、②男女の生理現象40%、③男女の体の違い39%、④非行防止29.7%で、⑤の生命の尊さは、学部生平均30.5%より6.5%も低い24%であった。異性への関心は18%で性別には男子20%、女子16%で性差なく、学部平均で男子が+10.5も高かったのに比し性差が少なかった。指導してほしかった項目のないもの12%であった。教育実践研究受講生の反応は、学部生平均よりも良好な状態で、指導してもらってよかった項目よりも、指導してほしかった項目に反応する率が高かった。

3. 小学校での生命教育についての意識を図2に示した。教育実践研究授業履習前は、性器教育だけでなく、心理、精神面での教育が大切であるとしたもの87.7%と大多数を占めた。履習後も同率であったが、わからないが4.9%で1.7%減少した。

4. 小学校家庭科で、生命の尊さ、異性を尊重する態度を教えることについての意識を図3に示した。履習前は肯定派が83.52%を占め、否定派が13.98%であったが、履習後は、とりあげる価値は十分あるが、5.0増の50.0%、とりあげてもよ

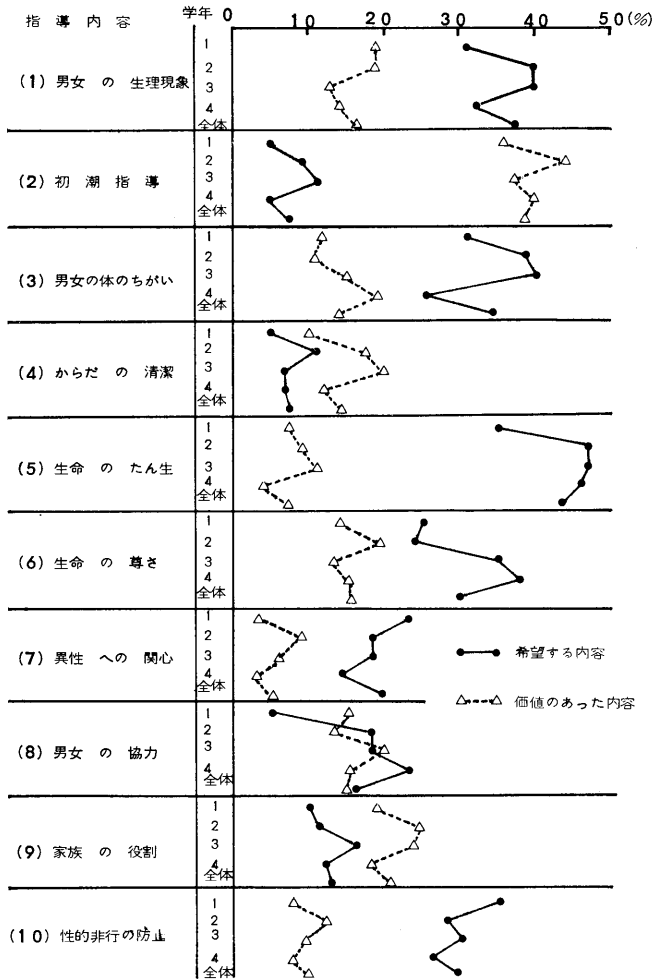


図1 小学校時代の指導内容

		単位 %			
履習前	履習後	性行動助長	心理、精神面の教育大切	家庭に任せる	わからない
	性行動助長	0.82	●		
	心理、精神面の教育大切	87.70	●●●●●●●●●●	●●	●●●●
	家庭に任せる	6.56	●●	●●	●
	わからない	4.92	●●●		●●

● : 10%    ● : 1%

図2 小学校での生命教育についての意識  
教育実践研究授業履習前×履習直後

い7.38増の45.9%となり、肯定派が95.9%を占めた。否定派は8.8の減で4.1%、その内訳は他の教科でとりあげればよいが5.56%減の4.1%、とりあげる必要がないが0%であった。

5. 単元「わたしたちの家庭」で胎内にいたときからの自分と家族とのかかわりを考える、というとりあげ方について、たいへん意義がある47.5%、意義がある50.8%で合わせて98.3%を占め、あまり意義がない1.6%、全く意義がないは0%となった。

6. 授業実践例の子どもにおよぼす教育的効果について図4に示した。両親が家族の自分への愛情を知る97.5%、両親や家族への愛情を深める82.0%と、自分と家族との愛情にかかわる項目に効果を強く感じていた。次に生命の尊さを理解する55.7%、男女の協力する姿を理解する36.9%で、その他4.1%、教育的効果はあまりない0.8%であった。

7. 教材の効果について図5に示した。4つの教材の効果を3点段落評点により順位づけを行うと、1位保護者からの手紙986点、2位生いたち年表613、3位胎児の様子OHP598、4位父親の声の録音400点で、1と4位の点差は586点であった。

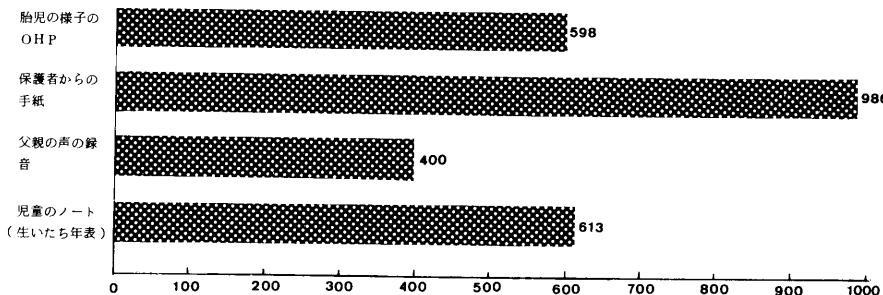


図5 教材の効果(3点段落法に基づく)

8. 授業実践例「わたしがお母さんのおなかの中にいたとき家族とのかかわり」を聴講し、受講生が考えた、次時への発展領域を図6に示した。

次時へどうつないでいくか、13の多様な領域への発展が考えられたが、集中度は低かった。つまり、1 家族の役割分担16.4%、2 栄養14.9%、3 家族の結びつき・家族生活13.4%の順であった。

9. 小学校家庭科の実習を効果的にするための実験例を示し、性や生命に関する概念の教育・教材化と併列の形で、その効果を評価し図7で示した。説明時間の長短との関係は考察のところでわかるが、とても効果的と、効果的を合わせると、最も比率の高いのは、胎児のときからの家族とのかかわり98.3%、汚れの取り方81.2%、照度測定77%、気温と着装76.0%の順であった。

10. 小学校家庭科のイメージを図8に示した。3点段落で順位づけをすると、自分が小学校時代に

		単位 %			
		とりあげる価値は十分	とりあげてもよい	とりあげる必要ない	他の教科で
履習直後	履習前	45.00	38.52	3.28	10.66
とりあげる価値は十分		50.00			
とりあげてもよい		45.90			
とりあげる必要ない		0.00			
他の教科で		4.10			

● : 10%    ● : 1%

図3 小学校家庭科で「生命の尊さ」「異性を尊重する態度」を教えることについて履習前×履習直後

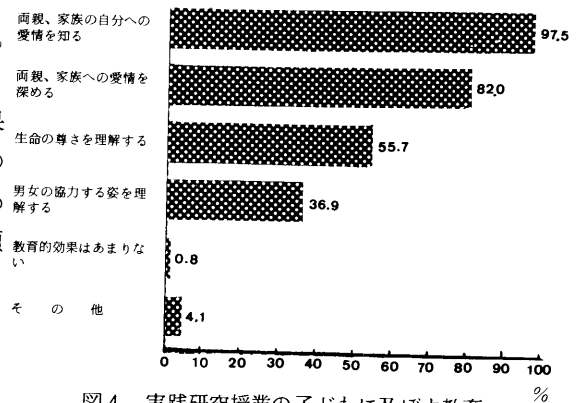


図4 実践研究授業の子どもに及ぼす教育的効果

NO	領域	%
1	家族の役割・分担	16.4
2	栄養	14.9
3	家族の結びつき・家族生活	13.4
4	家庭の仕事・自分の仕事	11.9
5	食物について	9.0
6	住居	4.5
7	男女のこと	3.0
8	健康	3.0
9	非行	3.0
10	被服	1.5
11	整理整頓・掃除	1.5
12	その他	10.5
13	無回答	7.4

授業実践例

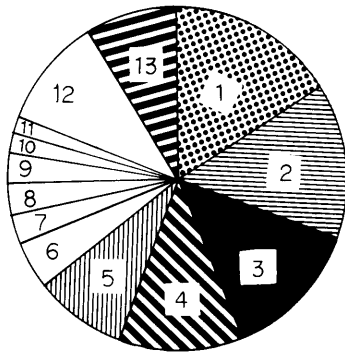


図6 次時への発展

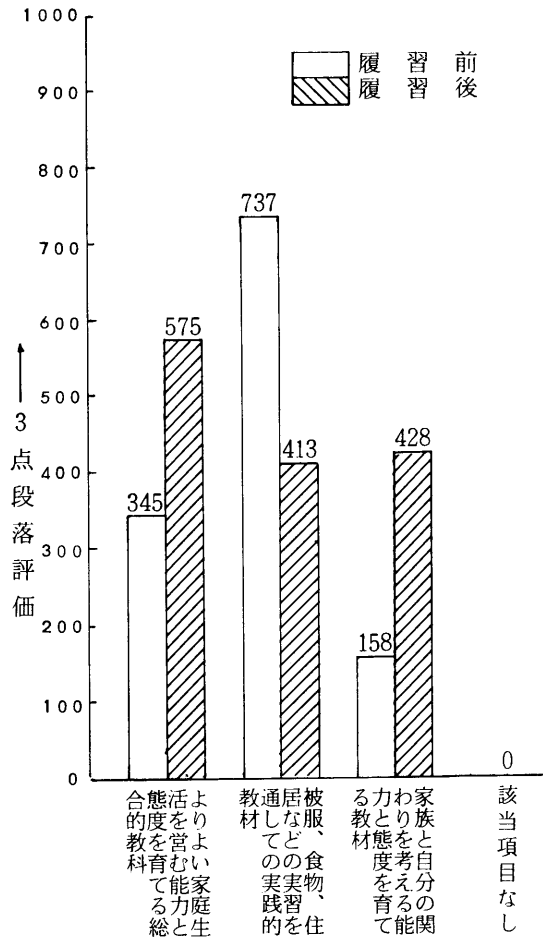


図8 小学校家庭科のイメージ

受けた家庭科のイメージについて最も評点の高いのは、「被服・食物・住居などの実習を通しての実践的教科」737点、次に「よりよい家庭生活を営む能力と態度を育てる総合的教科」345点、「家族のつながり、家庭の中の自分について考えようとする能力と態度を育てる教科」158点と続き、1番強く感じるイメージと3番目に感じるイメージとの間には大きな差があった。

実践研究授業履習後の家庭科のイメージは最も評点の高いのは「よりよい家庭生活を営む能力と態度を育てる総合的教科」575、次に「家族のつながり、家庭の中の自分について考えようとする能力と態度を育てる教科」428、続いて「食物、被服、住居などの実習を通しての実践的教科」413点となった。履習前のイメージと比較すると、圧倒的に高得点であった実践的教科というイメージが低くなって、よりよい家庭生活を営む能力と態度を育てる総合的教科ということが、強くなった。しかし、各評点の差は履習前の579点に対し、履習後は非常に小さく162点差となり、各イメージが平均化されて意識されるようになった。

#### 11.かみにくさの違う食物、あごの大きさと歯並び

あごの大きさと歯並びの関係は表4の最下段に示した。均合っている46.13%、あごが小さく歯並びが重っている部分がある28.78%、どちらともいえない13.28%であった。性別には、一枠内の上段が男子・下段が女子に該当するが、「重なる部分がある」をみると、男子22.08に対し、女子は32.18

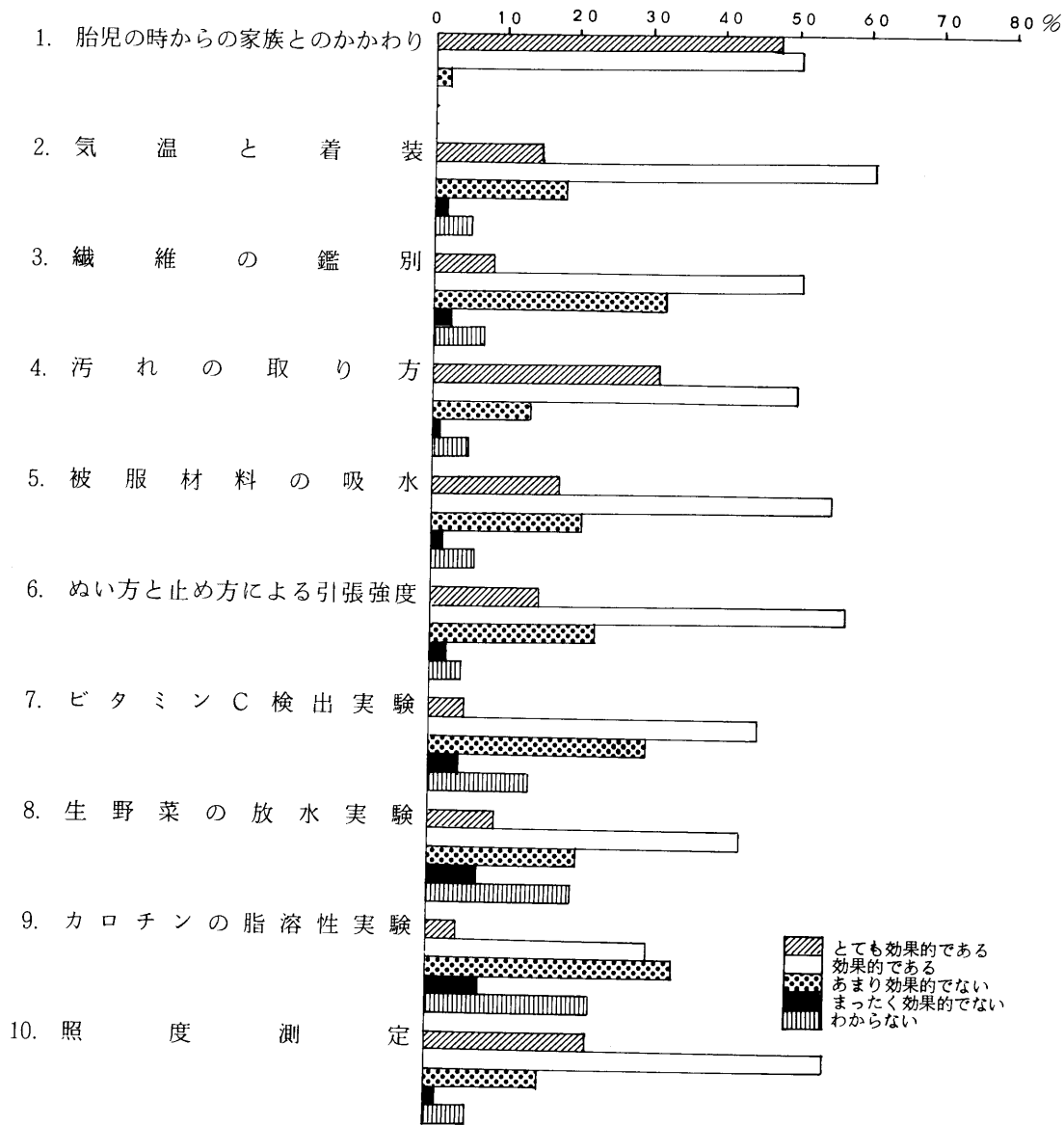


図7 「実習を効果的にするための実験」の評価

%と、男子より10.1%も高率であった。

歯並びと食物をかむ回数を、リンゴを例に表4の最上段に示した。リンゴ1切れをかむ平均回数は、均合っている24回、重なりがある25回どちらともいえない23回、その他は27回であった。性別には男子22、女子26回で女子が男子より4回多かった。かむ回数の性差の最も大きな歯並びは「重なる部分がある」の6回であった。

12.かみにくさの違う食物別に、かむ回数を11階級とし、その割合を図9に示した。左側が男子、右が女子で、食べ物の種類は、上段から①ハンバーグ一切れ、②生キャベツ千切り一箸、③カレー Spoon、④リンゴ一切れの順に示されている。

最も比率の高い階級を性別にみると、ハンバーグは男子16~20回23.7%、女子26~30回20.0%で

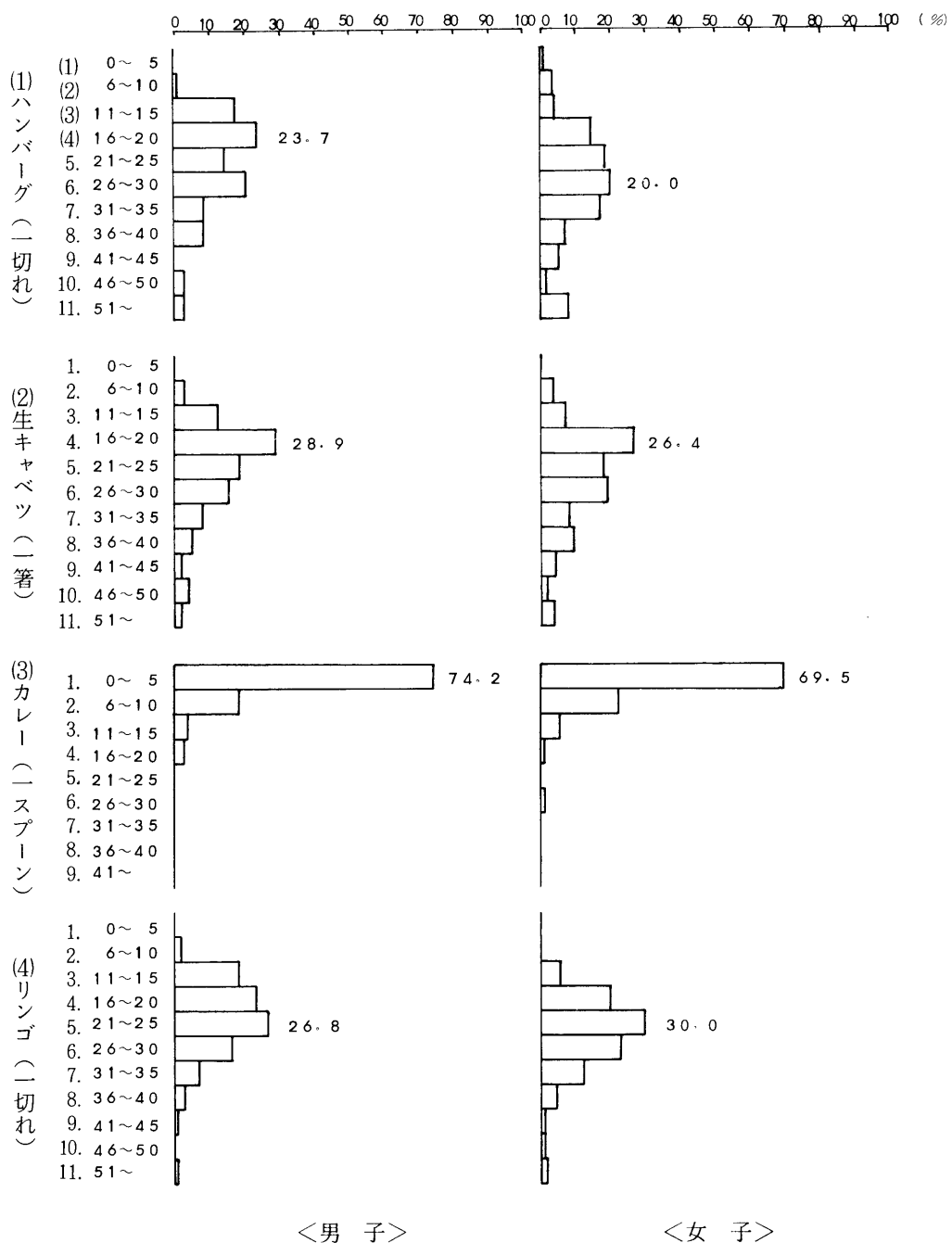


図9 かみにくさの違う食物とかむ回数



表4 あごの大きさとリンゴをかむ回数

単位：%

階級	アーチ状態 平均回数	1. 均合っている		2. せまい・重り		3. どちらとも いえない		4. その他		5. 無解答		男子	女子	計
		22 25	24	21 27	25	24 23	23	24 28	27	24 24	24	22 26	24	
1. 0 - 5														
2. 6 - 10	2.13		0.80	4.54	1.28								2.06	0.74
3. 11 - 15	17.02 6.41	10.40		27.27 3.57	10.26	16.66 11.11	13.89	20.00 6.25				18.56 5.75		10.33
4. 16 - 20	27.66 21.80	24.00		22.73 14.28	16.67	16.66 33.33	25.00	18.75	14.29	40.00 16.67	27.27	23.71 20.12		21.40
5. 21 - 25	23.40 25.64	24.80		18.18 33.93	29.49	44.44 27.78	36.11	40.00 25.00	28.57	20.00 66.66	45.46	26.80 29.89		28.78
6. 26 - 30	21.28 30.77	27.20		13.64 19.64	17.95	5.56 11.11	8.33	20.00 18.75	19.05	20.00	9.09	16.50 22.99		20.66
7. 31 - 35	2.13 11.54	8.00		13.64 12.50	12.82	5.56 11.11	8.33	20.00 18.75	19.05	20.00 16.67	18.18	7.22 12.64		10.70
8. 36 - 40	4.25	1.60		12.50	8.97	5.56 5.56	5.56					3.09 4.60		4.06
9. 41 - 45	2.13 1.28	1.60		1.79	1.28							1.03 1.15		1.11
10. 46 - 50				1.79	1.28			6.25	4.76			1.15		0.74
11. 51 以上	2.56	1.60				5.56	2.78	6.25	4.76			1.03 1.72		1.48
男子		48.45		22.08	28.78	18.55	13.28	5.16	7.75	5.16	4.06	100		
女子		44.82	46.13	32.18		10.35		9.20		3.45		100		100

あった。棒グラフはその階級を頂点とする山形を示し、階級は10階級までの広範に分布し11階級の51回以上も8.1%もあった。

生キャベツ千切り一箸は、男女共16~20回が28.9、26.4%で最高であった。階級の中は11でハンバーグと同じであったが、ハンバーグより集中度が高かった。

カレー、一スプーンは、男女共0~5回で、男子74.2%、女子69.5%で、4階級までの狭い幅に100%の学生が分布し、4種の食べ物の中、最も集中度が高かった。

リンゴ一切れは、男女共21~25回で男子26.8%、女子30%であった。

#### 4 考 察

教育実践研究、小学校家庭…性や生命に関する概念の教育・教材化…の授業の受講生に対し、履習前・後の意識の変化を中心に調査したが、対象学生は、日本の性教育の始動期に誕生し、高揚期に小学校の家庭科を履習していた。そのために性教育を受けたとするものが82%と高く、その有用性についても高く評価していたにもかかわらず、性や生命に関する基礎的知識の定着性は1/3弱で、現在までにしっかりと指導されたとはいえ難しく、教員養成学部の指導課程も含めて、今後検討していかなければならない問題であろう。

小学校時代の指導内容にかぎってみても、受講生は指導してもらってよかったと思う内容に、学部の他の学年よりよく反応し、該当項目のない割合も低かったのは、教育実践研究受講生の反応が、

学部生平均よりも良好であったといえよう。この理由としては、本調査が、9月実施のため、4月からの教育実践研究授業が、この頃になって学生の意識により影響をもたらしたと推察できる。

小学校家庭科における性や生命の概念に関する教育・教材化の必要性について、形を変えたいいくつかの質問に対し、履習前に否定的回答をした学生も、履習後には肯定的な意識に変化してきたこと、特に、積極的否定が0%になった事実は、実践研究授業の大きな意義を、そこに見出すことができる。

具体的に、単元「わたしたちの家庭」で、胎内にいたときからの自分と家族とのかかわり、のとりあげ方について、ほとんどの受講生が子どもにおよぼす教育的効果があるとし、自分と家族との愛情にかかわる項目、生命の尊さ、男女の協力の順に強く効果を感じ、効果はあまりないとする学生は、わずか0.8%にすぎなかった原因は、授業の中心に、親と子の絆をおいたためであると考え。生命現象を分析的にとらえた一つ、生殖、遺伝の項で、生物は自分と同じ個体を増殖し、これを子孫に与えていくという“親と子”“自分と家族”の生物としてのつながり、愛情を基盤とした結びつきを考え、親子の問題を、人間も生物という科学の目でとらえ、中でも出産前後の母子関係が、子どもの成長に大きな影響を与えることを受講生が認識した結果であろう。

提示された4つの教材の中、「保護者からの手紙」が最も効果があると評価し、自身も親からこんな手紙をもらいたいとつぶやく学生がいた。現在の日常の行動に、あれこれいわれている立場とは逆に、誕生時にかけられた愛情への期待と願望であると受けとれる。手紙を手渡され、読みすすむ子どもの表情をとらえたVTRからも、自分が胎内にいるときから、両親をはじめとする家族が、自分の誕生を愛情を希望をもって待ち望んでいたこと、誕生後も、一生懸命に気を配り、大切に育ててくれたことを、父の手紙から読みとっていく子どものいきいきとした表情は、何ものにも勝る感動を呼ぶものであった。

「胎児の様子のOHP」は、胎児がへその緒を通して、母体から栄養を取り入れ、老廃物は捨てる、という仕組みが偏光板を使って視覚的にはっきりととえられる効果があり、偏光板を使って、物の流れを示すことを初めて知った学生も多く、子どもと同様に喚声のあがった一コマであった。この教材は、栄養と老廃物がへその緒を通して移動することを、模式図的に提示することのできた教材であり、授業実践例報告者の創造性や子どもの動きと教材提示のタイミングのよさは、指導能力の優秀さが、高く評価される点である。

「父親の声の録音」の教材は、実践研究授業の際、カセットレコーダーの調子が悪く、また3人の父親の声を、同一人物が読みあげているので、学生が臨場感を得られず、効果が感じられなかった。実際に子どもの様子をみていると、両親からの手紙や、胎児の様子のOHPの方が、はるかに効果が大きいと感じられた。今後の課題として、教材の父親の声はそれぞれの声で録音し、聴くものに臨場感を与える必要がある。

生命の教材化の家庭化における相対的な効果を知るために、教材研究の立場から、すでに一般化している実習を効果的にするための主な実験9例と比較してみたが、実践研究の授業中での説明にかけた時間がそれぞれ異なり、厳密な意味での比較にならない。「胎児のときからの家族とのかかわり」は50分かけたのに対し、実験9例は、準備した小冊子<sup>3)</sup>とVTRの放映を伝達手段として、20分で説明した。9例中特に具体的に取りあげた4例の実験は、いずれも他の実験に比して、非常に効果的であるとする割合が高く、まったく効果的でないとする割合が低いことから、具体例を詳しく述べたり、実際の実験操作を見せ、視覚に訴えるものほど、学習効果が認められることが理解でき、家庭科の授業展開における創意工夫の必要性を感じる。

生命の教材化と比較すると、非常に効果的が最も高率であった「汚れの取り方」の31.2%に対し、

「胎児のときからの家族とのかかわり」は47.5%と高く、じっくりと教材研究をおこなったうえに、効果的な手順を考えて、1時間の授業にまとめられた生命の教材化の実践例は、教育的効果の高い、優れた指導内容であった。

説明不十分であった実験例は、後日の模擬授業の教材として取りあげ、十分なゆとりをもって教材提示された結果、模擬授業をも含めた教育実践研究の授業として、初期の目的は達せられた。それは次のことから立証できる。受講生自身が小学校時代に受けた家庭科のイメージは、実習を通しての実践的教科のイメージが非常に強く、実践研究の家庭の授業履習後の家庭科のイメージは、履習前と大きな変化が認められ、家族とのつながり、家庭の中の自分を考えることの大切さを認識した。科学・技術・総合の3つの視点は、いずれも、家庭科の性格を表わす重要なものであり、履習後に実践的教科としての家庭科の根底にある「よりよい家庭生活を営む能力と態度を育てる総合的な教科」というイメージが上ったことは、家庭の仕事を生生活把握の側面から教材化するばあい、現存する家事技能のみとりあげ、その習熟をめざすのではなくて、子どもの認識を発達させるような体系性を考慮する必要があることから、意義深く、次時への発展は、創造的な内容も含めて多様なものであり、教材の自主編成にも大きな期待がもてよう。

誕生時に両親や家族が期待した健康な体、丈夫な歯、情緒豊かな子どもなどの願いは、加齢とともに、いかなる成長過程をたどっているであろうか。その1例として、生命の維持存続に必要な食物の摂取、そして、その第1消化器官である口腔をとりあげ、あごの大きさと歯並びを次の課題とした。1960年代に端を発した食品の変化<sup>4)</sup>は、20年余を経過した現在の子どもの食習慣を「汁っぽくて、かまないで食べられる軟らかい食品が好きで、硬い物、かまわずに食べるとのどを通りにくいものは嫌い」という食習慣にかえてしまった。しかも、この傾向は生活環境間の差異が認め難いところまでできている<sup>5)</sup>。昨今の母親の得意な料理を称して「オカアサンヤスメ」といい、オムレツ、カレー、サンドイッチ、ヤキメシ、スパゲッティ、メダマヤキがあげられている。さらにすすんで「ハハキトク」\*ハンバーグ、\*ハムエッグ、\*ギョウザ、\*トースト、\*クリームとなり、子どもの心身の成育に大きな影響をおよぼしている。

人類があごを使う量は極端に減り、あごの退化が進んできているといわれ、しかも過剰な栄養素摂取の影響をうけて、最近では、歯が大きくなる傾向さえみられるので、歯とあごの不調和があると、歯が並びきれなくなり、歯並びが悪くなり、不正咬合がおきる。もう1つの問題は、歯が生え難くなるため、上下の歯が相互にかみ合うまでの時間が長びくことで、食物を噛むことによって、歯がきれいになる自浄作用が働かないので、非常に早くむし歯ができてしまう。現代人の糖分が多く、粘着性が高く、線維質の少ない食物では、自浄作用を期待することはできず不調和の増大が、これに追打ちをかけているのが現状であるといえる。咬合せず本来の機能が果せない口腔でも、生存は可能であるが、この状態で生きることは、歯科疾患の極度の増加をとまなうものであって、常に不必要な病苦に悩みつづけることになろう。もう少し歯本来の機能を開発し、咬合の能力を高めるための工夫が、生命の維持存続の第一歩として必要となろう。ここでいうちょっとした工夫が、授業実践例の「食事の見直しカード」として教材化されたものである。

1980年代は、生命に関するたゆみない研究が続けられ、情報が届けられ、「生活を見直し工夫する」ことを目標とする小学校家庭科の生命の教材化は、「科学」に対応させることで、生活事象に即して総合化する学習を組織できるため、教材を精選することに、大変な努力を必要とする。本研究では、教材化の過程の「選択された情報・知識」の「採り入れ」に一応の成果をみたと考えられるので、今後の課題は、小学校家庭科教育の内容の側で、種々な条件を整備し、教材を精選し、それらを教材として定着させるようにしなければならないと考えている。

## 5 ま と め

教育実践研究小学校家庭の授業の受講生を対象に、生命の教材化に関する意識調査をおこなった結果

1. 「胎児のときからの家族とのかかわり」は、小学校家庭科の内容として効果的であると、ほとんどの受講生が評価した。
2. 「わたしがお母さんのおなかの中にいたときの家族とのかかわり」の授業の中で提示された4つの教材の中、「両親からの手紙」が、最高の評価を得た。
3. 履習後の小学校家庭科のイメージは、履習前圧倒的に高得点であった実践教科というイメージが低くなって、「よりよい家庭生活を営む能力と態度を育てる総合的な教科」というイメージが強くなり、しかも、各イメージが平均化されて意識されるようになった。
4. 教材化の過程の「選択された情報・知識」の「採り入れ」に一応の成果があったので、今後の課題は、小学校家庭科教育の内容の側で条件を整備し、教材を精選しそれらを教材として定着させるようにしたいと考えている。

本研究をすすめるにあたり、附属長岡小学校教諭、木村輝子先生には、授業実践例を報告していただき、教育学部教員養成実地指導講師の木村節子先生には、骨身を惜しまぬご協力をいただきました。両先生に厚く御礼申し上げます。

教育実践センター・木津教明技官には VTR の編集で、お世話になりました。

さらに申し添えることをお許しいただけるならば、教育実践研究のスタートした昭和57年度の、家庭科内部事情は、前年の教官定員減の決定につづき、人事の凍結、転出・入の激しい年度にありました。科運営上の、のるかそるかのきびしい状況の中で、一応の成果をおさめることができたことを、ご協力いただきました諸氏に感謝したいと思います。

## 参 考 文 献

- 1) 高橋類子ら：小学校家庭科における生命の教材化（第2報）—教育学部生の意識— 執筆中
- 2) 河合隼雄・小林登・中根千枝編：親と子の絆—学際的アプローチ— 創元社（1983）
- 3) 高橋類子・木村輝子・木村節子・大野正江：小学校家庭科の授業 中沢プリント社（1982）
- 4) 細谷憲正編：からだの科学増刊1新栄養学読本 p.75 日本評論社（1983）
- 5) 岡田玲子：生活環境別にみた食と栄養の変化、鈴木継美、大塚柳太郎、柏崎浩編 食生活研究 2 103~131 第一出版（東京）（1981）
- 6) 井上直彦：歯 その本来的働き 保健の科学 26 17~20（1984）